

## 審査の結果の要旨

氏名 白井 芳樹

我が国が近代化を遂げる過程で、大都市、地方都市を問わず土木の仕事が一定の貢献を為したことは容易に想像できることである。しかしながら、かかる観点から、特に地方都市における土木史を捉える試みはほとんど皆無であると言ってよい現状である。本論文は、北陸の地方都市である富山市を中心とする地域で、昭和初期に行われた複数の土木事業及びその計画・事業の中心となった土木技術者を採り上げ、各土木事業の特徴、計画立案の過程、土木技師の経歴と仕事を明らかにし、さらにこれら土木事業相互の関係及び土木事業全体の意義を論考したものである。このような、一定の地域で同時期に行われた、治水、交通、都市計画という分野の異なる複数の土木事業及びこれらの事業に携わった、河川、橋梁、都市計画という専門の異なる複数の土木技師に着目して地域の土木史を読み解く試みは、既往の研究に見ることはできず、独自性の高い着眼点であるといえる。第一章では、上記の内容を研究の背景として述べている。

第二章では、第三章以下の前史として、明治～大正期の富山県及び富山市における土木事業について、治水・利水・砂防、交通基盤、都市整備の分野ごとにその概要を紹介し、昭和初期の富山市における課題を述べている。

第三章では、神通川第三次改修事業（大正7年～昭和13年）及び東岩瀬港修築事業（大正11年～昭和11年）について、計画・事業の特徴、計画立案の過程ならびに内務省神通川改修事務所主任高橋嘉一郎（1892 - 1968）の経歴と仕事を明らかにしている。特に、神通川改修事業着手後二度にわたって河口部の計画が変更され、東岩瀬港の修築計画が立案される過程に着目し、第一回変更の際には内務省作成の原案（第一～第三案）が存在していたこと、第二回変更により河道全部を港湾に提供する計画は高橋が前職で従事した北上川改修事業での経験等を基に独自に計画したものであることを明らかにしたことは、重要な成果であると言える。

第四章では、富山県による橋梁改良事業を採り上げ、分けても代表的橋梁である富山大橋（昭和11年竣工）の改築について、計画・事業の特徴、計画立案の過程ならびに富山県土木課技師小池啓吉（1895 - 1972）の経歴と仕事を明らかにしている。特に、富山大橋が当初下路式トラス橋として計画されていた可能性、ゲルバー式鋼桁橋として当時最大級の規模を有し、また郊外橋には珍しく橋詰広場を備える等の特徴を指摘したこと、また、富山大橋の設計施工を担当した小池が、前職東京市橋梁課設計、工事掛長として、両国橋等震災復興橋梁事業の中心的技師であったことを明らかにしたことにより、富山大橋の構造形式選定や橋詰広場等の技術的背景を明ら

かにし得たこと、さらに県内で同時期に行われた、多彩な構造形式の、かつ全国的に大規模な橋梁改築事業も小池の存在をもって説明しうることを示したことは注目すべき成果である。また、関東大震災後の復興橋梁事業に従事した土木技術者がその後地方に転じ、各地の橋梁事業に腕を振るったと言われているが、本論文はそのことを具体的に明らかにしたものであり、土木史研究として有意義なものと言える。

第五章では、富山都市計画(昭和3年決定)及び同都市計画事業運河、街路、土地区画整理(昭和3~11年)について、計画・事業の特徴、計画立案の過程ならびに都市計画富山地方委員会技師兼富山県都市計画課技師赤司貫一(1890-1954)の経歴と仕事を明らかにしている。特に、富山市が単独で都市計画法の指定を受けた経緯を明らかにしたこと、さらに富山都市計画の眼目とされる、運河と神通川廃川地の埋立・区画整理を一体的に行う都市計画が策定されるに至る経緯を、廃川地処分問題が浮上した明治末期に遡って丹念に追求し、当初の十数年間は廃川地単独処分案であったこと、運河・廃川地組合せ案は大正15年に富山県から提案されたものであることを明らかにし、かつ、この計画案は、前職において熊本県埋築技師として海面埋立事業に従事していた赤司がその経験を活かして立案した可能性が極めて高いことを指摘したことは、研究成果として高く評価できるものである。また、赤司が草創期の富山都市計画を担い、都市計画愛知地方委員会技師に転じた後は、石川栄耀の実質的後任技師として名古屋都市計画の第二期を担ったことを明らかにしたことは、戦前の多くの都市計画が、赤司のように都市計画地方委員会を渡り歩く土木技術者により担われたものであることを具体的に示したもので、有意義な成果である。

第六章では、前三章の成果を総合する形で、昭和初期の富山都市圏における土木事業の共通の特徴及び相互の関係ならびに事業全体としての意義を考察している。特に、治水、交通、都市計画の複数の土木事業が計画・実施の各段階で密接に関係しながら行われたこと、その関係は同地域を貫流する神通川を共通の背景として読み解き得ることを明らかにし、さらに全体を統べるマスタープランは存在しなかったが都市計画が中心的役割を担ったことを指摘し、かつ富山都市圏の近代化に決定的な役割を果たしたことを論じている。

以上概観したように、本研究の最も評価すべき点は、各土木事業・土木技師についての新しい事実を発掘するという歴史研究としての成果と、それらの知見を基に、治水、交通、都市計画に関する地域土木史とそれら事業の中心となった三人の土木技師に関する人物土木史を重ね合わせ、昭和初期という時代に、富山都市圏という地方都市において行われた土木事業の特徴、関係、意義を総合的に論じている点である。地域土木史・人物土木史に対するこのようなアプローチは既往の研究に見ることのできない、独自性の高い方法論であると結論づけることができる。よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。